

グレイセア王国は、主に2つの身分に分類されていた。

下級国民と上級国民である。

下級国民は強制労働を課せられ、稼ぎのほとんどはかけられた重税によってなくなり、手に残るのは生きていく最低限の金額だけであった。

対して上級国民は、下級国民から吸い上げた物を贅沢に使い、酒池肉林を愉しんでいた。また時には美しい下級国民を自らの性奴隷として奪い、時には面白半分に殺すなどの非道な行いをしていた。

そうして虐げられていた下級国民は現状に怒りを抱き、一部がレジスタンスを立ち上げ、各地で蜂起。瞬く間にレジスタンス活動は、国中で活発になってしまった。

レジスタンス達は食料生産施設や武器生産施設などで働いている下級国民などの協力を得て、上級国民に対して優勢であった。

そうやって、レジスタンスが優勢になれたのは理由がある。

まずは士気だ。

上級国民を打倒し、身分隔たりない国を作ろうと熱い意識を持っているレジスタンスの士気はうなぎ登りであり、また虐げられてきたことによって精神的にも強かった。対して上級国民側の兵士は罪を犯した下級国民たち、通称“奴隷兵”であり、裏切りをさせないために首には爆弾付の首輪を装着され、兵士としての意思があるわけもないため士気は最低だった。

次に戦略だ。

レジスタンスはひとまとまりで動いておらず、いくつもの組織に分かれて、独立して動いている。ただ、秘匿通信で各レジスタンス組織は綿密な連絡を行っており、ある組織が動けば、別の組織が揺動として動き、実働部隊が苦戦し、揺動部隊が優勢ならば、実働と揺動の立場を逆転させて確実にレジスタンスとしての勝ちを拾ってきた。上級国民側からすれば、どのレジスタンス組織が揺動なのか実働なのか分からず、対応を決めかねている間に敗北をしてきた。

こういった状況に強い危機感を覚えた上級国民らは、レジスタンスを殺して殲滅するのではなく、洗脳処置を施して、上級国民側の兵士として働かせることを決めた。

レジスタンスも百戦百勝とはいかずいくつかのレジスタンス組織を皆殺しにしてきたが、この方策を取ることで内側からの崩壊を目論んだのであった。

「さてさて……」

上級国民の大多数が暮らす、グレイセア王国首都。その王都の城にて、上級国民の中でもより高位の者たちが集まって対レジスタンスについて会議をしていた。その部屋の中にある円卓に、初老の5人の男性と2人の女性が座っており、誰もが贅を尽くしたきらびやかなジャケットやドレスを身に纏っている。

「方針は決まったとして……、どなたが兵士を率いますかな」

兵を率いるということは、王都を出なくてはならない。外でも贅を尽くすことは可能だが、それでも質は少し落ちる。

それを嫌がって何人かが悩むそぶりを見せるだけで、誰も手を挙げない。

「私に任せてもらいましょうか」

そんな中、小太りの男が手を挙げた。

「グリアス殿。よろしいのか？」

「はい。ただ……、レジスタンス共の処遇と所有権は私持ちということで」

「それぐらいよろしいですよ。ねえ、皆さん」

「うむ。私も都市外など死んでも行きたくないですからな、それぐらいなら好きに決めてもらって」

「よろしいかと思えますわ。グリアス殿の好きなようにしてくださいまし」

「ただ、洗脳処置を施して兵士として用いることもお忘れなく」

そう言うわけで、対レジスタンスの将軍にグリアスという男が決まり、会議は解散。グリアス以外は贅を貪るために自宅へと帰っていった。

グリアスは自宅に着くと、息子であるユリアスを呼ぶ。

「なんだ、親父」

グリアスの息子、ユリアスは美しい赤の生えるジャケットを身に待っていた。細身の体つきだが、筋肉はついており、父親のだらしない肉体とは全く違っている。

「私は今回、対レジスタンスの将軍の任を受けた。お前もともに来るんだ」

「はあ？ やだよめんどくせー」

「レジスタンス共の処遇と所有権はもらってきた。奴らを好きにできるぞ」
「ふーん。レジスタンスに女はいるのか」
「ああ、いるぞ。なんでもワルキューレという女だけで構成されているレジスタンスがあるらしい」

その言葉に、ユリアスは獐猛な笑みを浮かべた。

「へえ、それは楽しみだなあ」
「うむ。お前ならそう言うと思っていた。ただ、議会の決定として捕えた奴らは洗脳処置を施して兵士として用いることも決まっているからな」
「なるほどね。国境の機甲兵は動かせないし、この都市の機甲兵もそんなに動かせないからなあ。規模が膨れ上がっているレジスタンスをこっち側にするのはいい手だ」

グレイセア王国の科学技術は非常に発展しており、国境や都市の防衛には機械で作られた人型兵士、通称“機甲兵”が用いられている。対して国内のほとんどで奴隷兵が用いられている。機甲兵は国境に2000体、王都に500体が配備されている。対するレジスタンスの規模は1万以上で今も規模を増やし続けており、数の上ではレジスタンスが有利に見える。しかし、この国のメイン武装であるレーザー銃を機甲兵は厚い装甲で何発も耐えることができ、全身に武器を搭載しているため、武力としては1体でレジスタンス10人分はある。レジスタンスたちは大きな被害を恐れて王都に進行せず、周囲の武器や食料工場を責めて、もっとレジスタンスの数を増やしてから王都へ進行しようとしていた。

「洗脳処置と言えば、付いてくるのはトローマン博士だよな」
「ああ、そうだ。洗脳工場も完成間近らしくてな。レジスタンス共を試運転に使うのもいいだろうな」

トローマン博士。
彼は、下級国民を何人も使って、実現不可能だと言われていた洗脳技術を作り上げ、発展させた科学界の傑物だ。
丁度、大規模な洗脳工場が完成間近であり、完成すれば全ての下級国民に洗脳処置を施して、彼ら彼女らを上級国民のためだけの、絶対的な永久的な奴隷とする計画が練られていた。

「兵士は？」
「奴隷兵500、機甲兵50だ」
「オーケー。親父の策は？」
「私には何もない。お前に任せよう」
「俺に任せると、第一目標はワルキューレって奴らだな」
「お前の好きにしる。ただし、レジスタンス共も勢いを増している。そいつらを探すことに時間をかけて、レジスタンスを勝ち続けさせるわけにはいかんぞ」
「分かってるよ。……よし、出発は3日後。それまでに策を考えとく」
「うむ。頼んだぞ、息子よ」

準備は進んでいく。彼らが何もすることなく、アンドロイドやシステムが自動的に兵士の招集などを行ってくれるのだ。
上級国民が住む王都では主に、アンドロイドが上級国民に使用人として使われている。たまに下級国民を使用人しているものもあるが、非常に稀だ。
上級国民たちは何不自由することなく、最高の学びと最高の暮らしの中で、下級国民の上に立つにふさわしい知識と下級国民は支配されるべき存在だという常識を身に着ける。レジスタンスが何故立ち上がったのか、その原因が分かっている今更この生活を捨てられないし、育ちきった歪なプライドが下級国民との融和など決して許しはしない。
腐りきった上級国民。
そんな彼らの打倒を夢見るレジスタンス。その中の一組織、ワルキューレはとある軍備工場を攻撃していた。

「目標は達成したわ!! 全員退くわよ!!」

大きな声で命令が飛ぶ。
複数個所で燃え、煙が立ち込めている、元は綺麗だったであろうが今は煤などで黒く汚れた白い通路を複数の女たちが、アサルトライフル型のレーザー銃を手に走っている。
命令を叫ぶ女は、ワルキューレのリーダーであるエリスだ。
エリスはレジスタンスの標準装備である、黒いズボンに白い服の上から偏光性のある茶色いチヨッキを着ているが、白い服の右肩にはリーダーの証である、この国の国旗にバツ印のついたワッペンが縫い付けられていた。

胸は大きく、欲望をたぎらせた上級国民が見れば否応なしに攫ってしまうほど魅力的な体つきをしていた。鋭い目つきは彼女の指揮官然とした雰囲気よりも引き立てており、元は鮮やかであろう腰に届くまで長く、ボリュームのある赤髪は黒くくすんでおり、エリスがリーダーとしてどれだけ前線に立っていたかがよく分かる。

「リーダー!! リラたちが機甲兵に襲われて爆発が直撃して壊滅!! こちらに来ます!!」
「くっ……!! 彼女たちの生存を確認している暇はないわね。私が殿を務めるから急いで退きなさい!!」
「は、はいっ!!」

エリスに慌てた様子で報告した女性は、逃げる面々と一緒に逃げていった。

「よし、これで全員ね。私も一つ、来たか」

走る最後のレジスタンス員が撤退したのを確認して、エリス自身も退避しようとしたが、通路中にたちこめている煙の中から機甲兵が彼女の後方5メートルの位置に現れた。

機甲兵は片手にレジスタンスたちが使っている同型のレーザー銃、もう片方の手に薄い偏光性のエネルギー波を放つ盾を持っている。肩には小型のミサイルポッドがあるが、もう撃ち尽くしたのか弾頭はないようだった。

機甲兵はエリスの姿を視認するとレーザー銃を発射する。

エリスは全速力で曲がり角まで逃げて身を隠すと、顔だけをちらりと通路にのぞかせる。

「ふう……。すでに作戦行動が終わっていて助かったわ」

なぜなら、機甲兵を倒さなくてもいいからだ。
もうすでに逃げれば勝ちという、勝利条件に変わっている。

「一生ここを彷徨ってなさい!!」

機甲兵の唯一の弱点、顔部分にある単眼のカメラをエリスは正確にレーザー銃で撃ちぬいた。レーザー銃は非常に軽い。軽いからこそ、些細な手の動きに銃口が簡単に動き、狙い撃ちは非常に高度な技術だった。それをエリスはやってのけた。

エリスは頭部カメラをレーザーが打ち抜いたのを確認すると、素早くその場から脱出した。

(ごめんなさい、リラ……。みんな……)

生存確認すらできず、死体の回収ができなかった仲間たちのことを想いながら。

その後、エリスは無事に仲間たちと合流し、無事に基地へと帰り着いた。レジスタンスたちの基地は基本的には地下にあり、レジスタンスは各地にジャミング装置を仕掛けているので、上級国民側は正確な位置を察することができないでいる。

今回の作戦行動で、犠牲者は5名。負傷者は50名。犠牲者も少なく、作戦目標も達成しているので、レジスタンスの勝利といえよう。

女性だけで構成されているワルキューレたちは勝利した熱気のある程度、入浴とともに身ざれいになることで冷まし、勝利した宴会を開いていた。

「ララ。リラのことは悲しいとは思いますが、ここでそんな悲しい顔をするな。勝ちを喜んでいるやつらに水を差しちまう」

「ああ、ごめんね。顔に出てしまっていたかな。いやはや、この喪失感の中々に慣れないね」

「悲しみを抱くのは当たり前なこと。慣れる必要もない。ただ、抱いた悲しみを現象として受け入れるのか、感情として受け入れるのかは選択する必要がある」

にぎやかに騒ぐ面々の中で、3人の女性が端の方で話している。

ひとりにはシェーナ。ひとりにはララ。ひとりにはアルミナという名であり、全員がワルキューレのリーダーであるエリスを支える部隊長である。

シェーナは年齢が25歳。ブロンドのすっきりとしたショートヘアで、腰のくびれがはっきりとしつつ、女性らしさが少々欠けるスレンダーな体形をしている。男口調かつ男勝りな性格で、顔つきも目じりがつり上がって三白眼なので、少々怖いイメージを抱く。他人の死に対してすでに数百と見てきたため、湧き上がる悲しみを現象として受け入れており、死に対しては感情が動くことがないため冷たい人だと最初は思う。だが、生きている者に対しては熱い感情を向けてくるため多くの人に慕われていた。

ララは年齢が19歳。髪色は藍色で、左目を少し隠すくらい左の前髪を伸ばし、背中の中ほどまで届く髪を下の方で結っている。胸も尻も身長も何もかもごく普通の体形であり、中性的な顔つきで目じりの上がった目がクールに見える。また、今は妹を失ったと思い悲し気な雰囲気を纏っているが、普段は物語に出てくる王子様みたいなキラキラとした雰囲気を纏っている。誰に対

しても優しく、クールな見た目と纏う雰囲気ので、女性だけで構成されているワルキューレでは非常にモテている。

アルミナは年齢が27歳。ワルキューレの中でも170cmと最も身長が高く、最も体つきがいやらしいともいえるほど魅力的である。セミロングくらいの長さの黒髪で、眠たそうな目つきで淡々と話す様子は少々怖い、相談に乗ったりして励ますときなどに見せる微笑んだ時の優しい顔は深い母性を感じさせる。彼女の隠された母性が、構成員の全てが父母を失っているワルキューレでは最上の癒しであり、構成員の全員が父母を失っているワルキューレでは一つの拠り所となっていた。

ちなみにワルキューレの年齢分布は19歳～22歳が最も多い。ワルキューレのリーダーであるエリスの年齢は22歳で、最年少はララの妹であり1歳年下だったリラであり、最年長はアルミナだ。エリスは3人の元へと向かった。

「何の話をしているの?」

「よお、リーダー。いやな、ただ単にララがリラを喪って悲しそうな顔をしてたんでな。おい、ララ。そんなに悲しいなら自分の部屋で悲しみな」

シェーナは、今生きているものたちを優先する。喜びでいるワルキューレの彼女たちに悲しみの感情が少したりとも伝わらないように、ララをこの場から離れさせようとした。

同じ仲間としてシェーナのことを理解しているララは、それが彼女なりの優しさだと理解し、妹を喪って溢れそうになる涙を生きている彼女たちのために堪える。

「そうするよ。ごめんね、リーダー。せっかくの宴だが、先に自室へ戻っているよ」
「付き添う」

ララとアルミナがひっそりと会場を出ていった。

「少し直球すぎるのではないかしら」

ふたりが会場を去るまでその背中を見つめていたエリスが、ぽつりとつぶやく。

「そうか? アタシだったらあんな顔でこの場において欲しくないって思うからな。ていうか、言うだろうな」

「はあ……。その素直さがシェーナのいい所なんだけど。まあ、いいわ。私は他のみんなの様子を見てくるわね」

「ああ」

エリスは食事を楽しみながら談笑しているほかのワルキューレのメンバーの元へと向かった。

同時刻。

「へえ、生存者がいたか」

いまだに黒煙が立ち昇る、ワルキューレたちに破壊された軍備工場にユリアスはいた。工場にて発動された危機信号を受け取り、急いで駆け付けたところだった。目的は工場を守ることではなく、レジスタンスの生き残りがいないかを確かめるためだったが。

そして工場到着後、奴隷兵500名は外で待機させ、ユリアスは工場の司令室で映像データを確認している間に、機甲兵50機に工場内で生き残りがいないかを搜索させていた。

「警備映像を見る限り、ここを襲ったのはワルキューレの連中。つまりこの生き残りの女はワルキューレのメンバーってことだよなあ。まったく、俺の運の良さには驚くねえ」

丁度、映像が見終わった時に、1機の機甲兵が肩に担いで連れてきた1人の少女をニヤリと笑みを浮かべて、ユリアスは藍色でポニーテールに結んでいる腰まで届きそうな髪の根本を引っ張って彼女の顔を見る。

「……う」

「ふむ。若いな。もう少し成熟した方が俺の好みだが、まあ、いいか」

顔つきは若くあどけなさが残っており、体つきも大人になる一歩手前といったところ。ユリアスの好みではなく少々食指が動かないが、それでもここまで育った女であれば、ユリアスはイケ

ル口だった。

「他に生き残りは？」
「イマセン」

ユリアスが少女を担ぐ機甲兵に尋ねると、すぐに返事が返ってきた。

「そうか。じゃあ、俺は転移装置で一旦洗脳工場に行って処置をしてくるからお前たちはアーシュラで待機してろ」
「リョウカイ」

ユリアスが言うアーシュラとは、移動要塞のことである。巨大なそれは800名まで収容可能であり、要塞の名の通りに様々な武装も取り付けられている。グレイセア王国が所有する10基の内の1基である。

この移動要塞アーシュラには転移装置が備え付けられており、同一の装置同士での転送が可能だ。アーシュラはこの装置を使ってこの軍備工場へ来るまでにかかった3日間を短縮するつもりであった。

ユリアスは機甲兵から少女を肩越しに受け取ると、彼女の柔らかくもまだまだ膨らむ余地のありそうな尻を揉み撫でながら指令室を去っていった。

「……ん」

目が覚めた……と表現すればいいのか。
軍備工場から連れ出された少女が目を開く。

「ここ……は……。わた、し……」

少女は思い出す。
突然の爆発を受けて吹き飛ばされ、通路の壁に激突して気を失ったことを。
そして確かめる。
自分はワルキューレという女性だけで構成されたレジスタンスの一員で、リーダーであるエリスを補佐する部隊長の一人であるララの妹、リラであるということ。
記憶障害などはないはずだ。

「目が覚めたかい」

俯いていた少女、リラに声かけられた。
俯いていた顔をゆっくりと上げたリラ。リラはララの妹らしい、忠誠的な顔立ちである。しかし、腰まで届きそうな藍色の長髪をツインテールにしており、ララの王子様のような雰囲気ではなく少女らしい雰囲気をしていた。
顔を上げたリラは自分が今どういう状況にいるのか分からないようであったが、数秒経つとやっと自分の状況が理解できた。
自分は捕えられているのだと。しかも裸で。

「—きゃあああっ!!」

風を、座らされている黒い椅子の硬い感触を、肌で直接感じている。それは己が一糸まとわめ姿だからだ。

女の色香を纏う少し前の、形のバランスのいいおわん型の乳房。入浴後は必ずムダ毛の処理をし、脇や肌には産毛が全くないが、ただ少々毛が茂っている閉じられたマンコ。女として完成する前の、一種の魅惑を纏わせている肉体をお披露目している彼女は、強い羞恥心を感じているが、その肉体の一部であっても隠すことはできない。なぜなら両腕は椅子の肘置きに拘束されて、腹部にはベルトが巻かれおり、両脚の付け根にも軽く股を開いた状態で固定するためにベルトが巻かれ、自由に動かせるのは顔と膝から下くらいだったからだ。

「落ち着け、そう暴れるな」

ユリアスがそう言うが、拘束されている状態でリラが冷静でいられるはずがない。
何とか逃げ出そうと全身に力を入れて身体を動かしているリラの行動は、ただガチャガチャとベルトのつなぎ目の音を鳴らすだけだ。

(落ち着いてなどいられないのです!! コイツはきっと上級国民!! きっと私を拷問してレジス

タンスの情報を抜き取るつもりになっているです!!)

彼女の正面にいる男、ユリアスがレジスタンスではないのは明白だ。
となると、目の前にいるユリアスは上級国民ということになる。
普通、上級国民につかまった者はすぐさま処刑されるはずだが、こうして生きて捕えられているのは情報を引き出したという意味。そんなことをされるのであれば、自死あるのみ。
そう思って舌を噛み切ろうと思ったが、リラはできなかった。これから拷問を受けるかもしれないのに。仲間の情報をしゃべってしまうかもしれないのに。
それはなぜか。
リラがレジスタンスとして、まだまだ未熟で死ぬ覚悟というものができていないからだ。

「お前、舌を噛み切ろうとしたな」
「一っ!?!」

暴れるのを止めて固まっているリラを見たユリアスは、そうリラに告げた。リラは自分が考えていたことを見透かされて、目を見開く。

「ホッホッホッ。威勢のいい下級国民じゃ。じゃが、できなかったようじゃのう」

ユリアスとは違う、また別の男の声がリラの背後から聞こえた。
その男は初老で白髪交じりのぼさぼさ髪をしており、白衣を纏っている。男は両手で、リラの頭をすっぽり覆うヘルメットを持っており、ヘルメットから伸びる複数のコードはリラの座っている椅子へと伸びていた。
この男こそが、洗脳技術の確立と洗脳工場を作り出したトローマン博士である。

「トローマン博士。洗脳よろしく頼むぜ」
「うむ、任せよ。ああ、始める前に洗脳強度について説明しておこうかのお」
「洗脳強度?」

洗脳強度とは、洗脳に対する抵抗力のことである。この強度は人によって細かく違うが、大まかに大、中、小の3種類の強度に分けられる。

「洗脳処置において洗脳強度の把握は重要じゃ。洗脳強度に合わせて処置をしていくからの。もし洗脳されるといふ噂が広がり警戒された時、洗脳強度に合わせぬ処置を施し、洗脳されたフリでもされたら一大事だからのお」

リラの洗脳強度は小。
トローマンが開発した洗脳装置にとって最も簡単に洗脳できる、洗脳弱者である。

「それでは始めるとしよう」
「一きゃっ!! わ、私に何をやるつもりなのですか!?!」

トローマンは両手で持っていたヘルメットをリラに被せた。
そのヘルメットはリラの中から上をすっぽりと覆い、何をされるのか分からない恐怖心からリラは頭をブンブンと勢いよく振る。

「下等な下級国民が味わうにはもったいない。そう……、もったいないほどの快楽を与えてやろうというのじゃよ。上級国民でも味わうことのできない、お主の全てを作り変えるくらいの莫大な快楽をお」
「どんな拷問をする気か分かりませんが私は絶対に屈しないのですっ!! 絶対につ、上級国民なんかに屈しー」
「さあ、洗脳開始じゃ」

トローマンは椅子の裏にあるスイッチを押した。
その瞬間、リラの頭にかぶせられているヘルメットから電流が流れだした。

「—ああアアああアアああアアああアアおオオオオオオオオオオオオツツツツツツ♥♥♥♥♥」

突如として頭から全身に溢れかえった膨大な快感は、彼女の両目を限界まで見開かせ、全身をビクビクビクッと痙攣させた。みるみる内に異常な興奮状態に包まれたリラのマンコは華開き、次から次に愛液を漏らす。
そして彼女が感じる感覚は快楽だけではない。
自分の頭の中を見えないナニかが弄くり回す、奇妙な不快感と恐怖を覚えていた。

